

東京証券信用組合の八尾和夫理事長は、半世紀に及ぶ職業人生のうち30年を日本銀行で過ごした。入行したのは1975年。オイルショックによる「狂乱物価」で民間企業の荒れ狂う様子から公的業務を志望した。大学受験の勉強の苦しさもあり「採用試験は筆記なしで面接だけ」と慶応大学の先輩からの助言が日銀就職の決め手となった。

従業員組合執行副委員長、在中国日本大使館一等書記官を経て87年4月に国債局（現・業務局）に異動。アメリカからの強い国債入札への拡大要請に対し、大量の入札事務を手作業で対応。「苦手な事務作業を初めて体験した。日銀時代の一苦労しい時期」。この経験がその後の金融マン人生の糧となった。

私のターニングポイント



59

日銀HP開設の発表記者会見に臨む八尾氏（奥左、1996年11月15日、日銀本店広報ルーム）



日銀広報の礎を築く

入行21年目の95年5月、情報サービス局の広報課長に就任。マスコミ経路ではなく、日銀自身が直接情報を発信する体制の確立が任じられた。日銀のホームページ（HP）を立ち上げた。その後、過去1年に開設されたHPを経済新聞が評価するインターネットアワードで大賞を受賞した。その後、情報の発信スキルを磨き、日銀広報の礎を築いた。

職業人生最大の危機に直面したのは、全国信用協同組合連合会の専務理事に就いた翌年の2006年から。同会の理事長の事故死、08年のリーマンショック直後の債券損切り判断と続いた。11年3月の東日本大震災では、

東京証券信組
理事長
八尾 和夫氏 (73)
(上)

決断力磨いた全信組連専務時代

信組組合員の被災避難者が全国どここの信組でも預金を下ろせる仕組みを被災後数日で構築することを実現させた。「トップの決断と高度な実務担当者の能力があつてこそ、組織が動かせることを痛感した」。

「理事長をやってほしい」。中央労働金庫の常勤監事を務めていた頃に声がかかった。全信組連時代から既知の仲だった東京証券信組の前・川端作治理事長からの誘いだっただ。これまで厳正・公正・中立を軸にしていた公的業務から一変し、ビジネスの世界に飛び込んだ。15年6月、63歳にして初めて民間金融機関の理事長に就いた八尾氏に待ち受けていたのは、2期連続の本業赤字を抱えた信組の経営再建という大きな試練だった。